

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

水谷昌義

1. はじめに

「筥を曳く」という言い方がある。あまり使われていない表現ではあるが、旅行することを意味する。筥は杖^{つえ}のことで、杖を伴ってとる行動、つまり歩くことを元々は表した。わざわざ歩く行為はすなわち旅行であるということでの意味になった。

杖を携え、白装束を着て、菅笠を被って、四国を巡礼する四国遍路がブームになっているといわれて久しい。それは千年以上前に空海が修行した足跡をたどり、四国各地に点在する88ヶ所の霊場を順にめぐる参拝である。夥しい数のガイドブックが発行され、また実践した人の旅行記の書籍の出版も相次いでいる。四国遍路のものでは、多くの書籍で札所巡りに関する宗教性や神秘性を謳い、体験者は精神状態や世界観の変化を感じ諦観の境地にいたったと結ぶ。しかし、それらの記述から純な信仰心をかきたてられることは稀であると考えられる。まじめな宗教心とは別の、ノリのよい動機付けが無ければ「普通の参詣人」¹⁾の押し寄せるブームには成り得ない。本稿は、本来われわれが持っている巡礼本位の感情を整理し、四国遍路の移り変わりを概観し、巡礼というものの現在の方向性について私見を述べようとするものである。

2. 巡礼とは

「巡礼」という用語には使用される場面によってさまざまな意味がある。

メッカ巡礼は、メッカを訪れ、カアバ神殿でタワーフの行（黒石が埋め込まれている神殿東南の角を基点に反時計回りに7周する周回）を行うものである（野町 2010 [32]）。遠いメッカの地まで辿り着くまでに、途上にある宗教上の重要地に行くつも立ち寄ることは常態であるが、途中を省いたからといって、メッカ巡礼が成り立たないわけではない。メッカ周辺の聖域が目的地であって、そこへの往復行動が巡礼の本筋ということである。これは日本でいうところのお伊勢参りや熊野詣と同じ参拝形態である。規模が大きくよく知られた「聖地を訪れる宗教的な旅」の日本国外の事例に適用されるものがこの意味での巡礼なのだ²⁾。

また、タワーフの行の作法が実際に周回行動をするものであるから、それを意識して巡礼

という表現が使われるようになったとも著者は考えている。なぜなら、お百度参りというものは現在、本堂に行ったり来たりを繰り返すお参りと思われているが、本来はお堂の周りを回ったものである。お百度参りには強い願い事があるだろうから、ある寺で巡って、それから別の寺まで移動し、そこでも巡る、ということが行われたであろう。巡る宗教が歩く宗教と結びついて大巡礼に変わっていったという主張もある³⁾。

これに対し、点在する数々のチェックポイントを巡ることを目的とした旅行をする意味で用いる巡礼がある。宇田 2007 [6] によれば、この種の巡礼に根ざすものとして遊覧・回遊・周遊などとの表現も同義であり、昭和 10 年以降は「観光」の表現が用いられるようになったという。すなわち、わが国の観光旅行の基本形である「名所旧蹟めぐり」がこの種の巡礼に相当する。最近では、なんらかの神秘性を持たせたり、脇目を振らず一心に行動する様式を表現する言葉として、あえて巡礼という語が使われることも多い。パワースポット巡礼⁴⁾ や、アニメ聖地巡礼⁵⁾ など数多くの事例がある。

本稿で使用する「巡礼」という語は、後者の名所旧蹟めぐりの観光の意味で使う。

名所旧蹟には満足度の大小はあったとしても、その対象箇所の総数はあいまいで、どの名所を取捨選択するかはおもに日程の都合で決められるだけである。この名所旧蹟めぐりについて「全体集合はこれである」との定義を下したものが、〇〇八景めぐりやスタンプラリーということになる。番号を振ってあることも多いし、訪問順序まで定められている場合もある。この場合、巡礼と特に区別して「順礼」と表記されることもある⁶⁾。全体集合が明示されたことにより、そこを巡る者にとってはコンプリート（全箇所の訪問）達成という充実感がプラスされる。コンプリートを成し遂げるまでは、自分の現在の進捗状況も観察できるようになる。全体集合を定義する主体のほとんどは、宗教的もしくは商業的目的を以って選定と広報を行い、その企画建てにより集客が成功することを目論んでいる⁷⁾。

この全体集合明示形巡礼のなかで、もっとも歴史があり有名なものとして四国八十八ヶ所巡礼がある。ほかに、西国三十三観音、坂東三十三観音、秩父三十四観音などがある。大路 2001 [12] や平幡 1981 [34] によれば、全国には数あまたの巡礼コースが存在することが分かる。大路は全国に点在する巡礼コースの状況について次のように解説している⁸⁾：

日本の地方都市の繁華街には、よく「〇〇銀座」という名称が付けられている。高級店が並ぶ東京の繁華街・銀座にちなんで、また、その“うつし”ともいうべき街づくりを目指し、全国各地に「〇〇銀座」が誕生した。一中略一人間の商業行為にからみ誕生したのが「〇〇銀座」であれば、観音信仰に基づいて全国各地に誕生したのは、平安時代末期に成立した「西国三十三観音」の“うつし”として、地方へ普及していった「〇〇三十三観音」である。古くは鎌倉・室町時代に開創した霊場もあれば、21 世紀になってもなお開創・復興の機運高まる霊場もある。

これほどまでに各地で巡礼コースが活況を呈するのは、コースの定義主体の企画力だけでは

ない、参加する主体の巡礼好きな下地が存在するからである。

3. 巡礼本位の国民性

わが国では、団体で名所を次々に尋ね回る旅行形態が相変わらず人気である。修学旅行から始まって、団体バスでの温泉旅行など、子供から年寄りまで団体旅行は一つの標準となっているとも言える。柳田 1931 [53] は、日本の旅行習俗のもつ特徴として、すでに昭和初期の時点において、「巡礼は日本では面白い形に発達して居る」として、このことを指摘している⁹⁾：

少なくとも何十箇所といふ霊場の数を繋ぎ合せて、わざと目的を散漫にしようとした形が見えるのである。参拝の大きな意義は寧ろ道途にあった。序に京見物大和廻り、思ひ切って琴平宮島も掛けてきたといふ類の旅行も、信心として許されたのであった。一中略一是から信仰を抜き仲間の選択を自由にすれば、則ち今日の名所巡りになるのである。

明治大正期の交通機関の発達に起因する旅習俗の近代的展開をとらえた柳田の観察力は、文化の連続性の観点から注目すべきものとする。この指摘を受けて、宇田 1994 [5] は、近世に萌芽した庶民階層における巡礼というレジャーが、相変わらず団体「巡礼習俗」として継続発展していった要因について、明快な見解をまとめた¹⁰⁾：

農民が仲間同士で団体を結成し、伊勢神宮・善光寺・金比羅宮など有名社寺参拝や札所巡拝を目的として旅に出かけるということは、領主側からすれば、彼らの収奪下に置かれた農民たちの不平不満の緩和・解消と、封建経済の発展にともない内部的に弛緩しつつある農村共同体の再結束の一方便として、農民集団の一時的「逸脱」行動にたいし暗黙の了解を与えたということであった。その一方、農民側からすれば、それは、自分たちを緊縛する土地と日常的な共同労働のくびきから、「信仰」という封建社会で許される唯一の大義名分を掲げて一時的に自由の身となり、仲間だけの集団社寺参拝に参加することをたてまえに、本音は道中各地を周遊して自己解放を試み、相互親睦を深めるために、主体的に実行したものであった。支配権力者でさえはばかり「神仏信心」というバリアーに守られて、表向き目的地の社寺への参拝は二の次とし、仲間だけで連れ立ってできるだけ広い世間を見て廻り、ハレの休暇を楽しむ「巡礼」習俗は、やがて時代を超えて近代社会の一般庶民階層の行楽の楽しみとして大いに盛んな展開をみたのである。

有名社寺への参拝を名目にして、気の合った仲間での団体での旅することに重きをおいていた集団主義志向は、わが国の人々に本質的に刻み込まれているものであるということである。そこでは、物見遊山や名所めぐりが本当の目的なのであったから、社寺参詣という大

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

義名分は残るものの、信仰の心は非常に希薄になっていったということである。その志向を市場的契機であるといちはやく看抜いた企業により、大衆の需要を触発するビジネスとして、団体周遊の旅行が展開されていったのである。

4. 四国遍路の位置づけの変遷

本節では、現在の四国遍路の移動交通手段を概観し、それに伴って巡礼に参加する人々がどのような意識でいるのかを追ってみることとする。

4.1 交通手段の発達

公共交通手段としては鉄道と路線バスがある。しかしながら、産業産品輸送を最大の目的として敷設された鉄道は、札所¹¹⁾めぐりには必ずしも地の利がよいわけではなく、列車本数の少ないこともあってそれほど便利なものではない。路線バスはさらに本数が少なく、通学時間帯以外は走っていないような場合も多い。よって、公共交通機関は遍路移動については主要な手段ではないようである。

一方、1953年から始まったとされる¹²⁾団体バスツアー巡礼は興隆をきわめている。団体バスには2種類ある。ひとつは檀家組織や近所の仲間同士でチャーターするもの、もうひとつはバス会社や旅行会社が旅程を組んで用意し、参加者を一般から募集するタイプのものである。後者では、各社が用意した、巡礼に特化したプランから観光をふんだんに織り交ぜたプランまで多彩なものの中から、自分の嗜好に合致したものを選んで1人からでも申し込むことができる。全88ヶ所を一気に廻るものから、1県内だけを廻るもの、あるいは日帰りプランなど、様々なものが用意されている。

個人や家族での巡礼の場合、タクシーや自家用車による利便性が飛躍的に高くなる。

タクシー・ハイヤー遍路の場合、団体バスよりも立ち寄り箇所などへの注文が自由であるし、立ち寄り地点での時間の融通もつけやすい。移動中に運転手から寺に関する知識や観光の裏話などを聞くことが出来たりするのも、タクシーならではのということになる。ただし、料金が団体バスに比して高額になってしまう。

自家用車もしくはレンタカーの利用は、立ち寄り地点にさらなる自由度が増し、料金的にも非常に低く抑えることが可能となる。不案内な土地を自ら運転をしなければならないが、高齢者も含めての運転免許保有率が高まり、カーナビゲーションも普及した現在、レンタカーによる巡礼はその数を大幅に増やした。その激増により、森栗 2008 [52] が指摘するように、限られた時間で効率よく回ろうとするため無理をする運転者が多くなった。また、柳田 1931 [53] がすでに「出来るだけ自宅と同じやうな生活をするを、交通の便だと解して居る者も稀で無い」と指摘⁹⁾しているように、自動車内は個人の空間であるという感覚があ

り、四国遍路の特徴である地元住民とのコミュニケーションの機会が減少するといった問題点も浮き彫りとなってきている¹³⁾。

巡礼をする人は、何らかの意識により四国遍路に行こうと決意するわけである。四国遍路を実際にどのように実施するかに対する意識が、これらの移動手段の現状から、大きく分けて2種類に分化していると観察できる。すなわち、①団体バスツアー参加者に見られるように、巡る場所の順番や現地での滞在時間などのスケジューリングをすべて他人に任せてしまい、つまり旅行内容への自発性の少ないタイプ、②自動車遍路選択者に見られるような、数を効率よく廻ることを目的とし、移動は個人空間での日常生活の延長として考えてはいるが、旅行を積極的に実行するタイプ、である。本稿では後者②により注目を置くことにする。

4.2 「歩き遍路」の台頭

鉄道や自動車といった乗り物が存在しないときには、当然のことながら旅行の移動手段は「徒歩」であって、歩いて移動することを特記する必要はない。日本酒や初代ウルトラマンのように、その名詞のカテゴリーにさまざまな新たな異種が含まれるようになると、特記する必要のなかった元来のものを新たなものから区別するために修飾語がつけられるようになる。「歩き遍路」という言い回しも、自動車等で巡礼することのほうに当然になってきたことで初めて使われるようになった表現ではあるが、旅の移動手段が徒歩しかなかった時代の巡礼そのものとは少し違ってきているのが特徴である。

小林 1990 [23] は、「歩き遍路」という語が初めてタイトル(サブタイトル)に使われた書籍である。この書籍に刺激を受けて喜久本 1994 [18] が、メインのタイトルに「歩き遍路」という語を含む本を出版した。両書とも、筆者の旅行体験記であるが、このころから「歩き遍路」の語の使用が普及し始めたというしるしである。続いて、「雑誌えひめ」に愛媛新聞社 1995 [10] の記事が掲載される。これは散漫な内容の記事で、タイトルと内容の齟齬が激しいものではあるが、「歩き遍路」という語がタイトルで堂々と使用された雑誌記事としてはごく初期のものである。

新聞を検索すると、読売新聞では1997年1月8日、毎日新聞は1997年11月19日、朝日新聞は1998年10月28日にそれぞれ最初の使用例がある¹⁴⁾。新聞記事の地の文章に使われているということから、1998年くらいにはすっかり世のなかに定着した用語となっていたことが窺える。それ以降は「歩き遍路」は、一般書でも学術書でも昔から存在する語であるかのように普通に使用されている。

さて、この「歩き遍路」は、自宅から四国の地までの往復は歩くわけではないという点で、乗り物のない昔から行われてきた徒歩での巡礼とは大きく異なっている¹⁵⁾。現地での手段として、自動車等による巡礼の対義語としての用語ということになる。元来、巡礼は宗教的儀礼としての「行」であり、一步一步足を進めるといった肉体的な苦難を通じて目的地に達する

こと自体に宗教的意味を強く付加し、それ自体が自己目的化されている。この宗教的体験への参加からくる満足感に加えて、歴史ある本来の四国遍路の姿をぜひ実践してみたいという本物志向の欲求もある。さらに、ウォーキングなどの健康ブーム・自分探しや自己実現といった自己変化ブーム、世情の不安からくる癒しブーム、パワースポット探検といった神秘ブームなどなどの各種のブームの要素も緋い交ぜとなって加わり、他のどの方法よりも時間的にも金銭的にも体力的にも贅沢なものである「歩き遍路」が、なかなか実行できないからこそできればやってみみたい別格の存在となってきたものと筆者は考える。

1988年に本四架橋児島・坂出ルートができて以来、四国への観光客は増加し、1998年には神戸・鳴門ルートが、翌1999年には尾道・今治ルートも全面開通し、四国を訪れる人がさらに増えた。それに従って、四国遍路をする人も増加したわけであり、歩いてめぐる人も当然に増加した。四国遍路をする人口の増加は、世の中のブーム云々だけでなく、アクセス手段の格段の向上があったことも記しておく。橋の開通にあてこんだ出版物の増加があり、そのなかで巡礼の手段を紹介するのに好適だった「歩き遍路」という語が盛んに使われるようになり定着したのだという要素があることについても見逃してはならない。

星野 1999 [43] は「歩き遍路」の動機についてインタビュー等で調査を行い、「歩き遍路のかなりの人々に共通していることの一つは、四国遍路に出る動機は信仰からではないということ」を明言、断言することである」という特徴を述べている。すなわち、宗教的理由ではなく、四国遍路という伝統的なシステムを利用した、チャレンジ精神をくすぐるアウトドア余暇活動としての位置づけである。行った先で体験して帰ってくる脱日常化レクリエーションのひとつとなったのである。それゆえやはり、数多くの札所を効率よく回ることは主な目的に含まれることとなり、自動車による遍路と同じような定量主義が根底には潜んでいる。

4.3 巡礼の線から点への変化

愛媛新聞社 1995 [10] のなかで、へんろみち保存協力会代表の宮崎氏は「四国霊場巡りは、世界でただ一つの循環式巡拝コース。点（霊場）と点（霊場）を結ぶ線のリゾートだ」と述べている。へんろみち保存協力会は四国遍路の原点は歩きにありとする主張の団体であるが、「千年の伝統を持つ線のリゾートとして、全国に誇れる観光的価値を持つ」として長期滞在型リゾートの可能性を力説している。ゴルフ場や各種の憩いの施設などは短期滞在型の「点」の観光施設として対比している。歩きでの四国遍路をとくに重んじる立場を割り引いて考えても、四国の自然と歴史の魅力を活用した観光戦略の方針として重要な提言である¹⁶⁾。

頼富 2009 [58] も点への変化を指摘する。巡拝バスツアーが四国遍路における革命的な変化であるとして、次のように述べている：

四国遍路の出発点にあった「道」を重視する辺路信仰は、「点」である札所を重要なポイントとする近代の遍路信仰へとスライドしていくことになる。「点」重視、す

なわち「道」軽視の突出した一例として、平成16年頃からは「日帰り遍路」と呼ばれるスタイルすら見られ始めた。

道空間研究会1994〔60〕でも点移動について述べられている¹⁷⁾。四国遍路では遍路者に食べ物などの施しをすることで功德を共有しようとする、「お接待」という慣習が古くからある。地元住民とのコミュニケーションの機会であるこの「お接待」がモータリゼーションの進展で変化してきていると述べている：

バスやマイカーで霊場の駐車場から駐車場へと参拝者が点移動するならば、この行為（「お接待」=筆者）は極めて限られた場所でしか成立しない。「線的コミュニケーション」は不可能である。成る程お接待の困難さはいわば日本の社会の変質の問題であるかもしれない。

ここにあげた見解はいずれも、「行」として肉体的な苦難を通じて目的地に達するという宗教的目的から、札所を重要ポイントとする近代の四国遍路への変化について指摘している。それを問題視するか仕方ないと見るかの立場の違いはあるが、この変化自体は紛れもない事実で、参拝者は地元住民とのコミュニケーションをとる存在ではなく、ただの通りすがりの観光客になってしまったのである。前にも指摘したように、自動車内は個人の空間であり、日常の豊かな生活の延長としての場になっている。しかも数を稼ごうと無理をしている状態のもとでは、「お接待」が成立しにくいのは確かであり、都会の人間関係がそのまま四国遍路に持ち込まれてしまっていると思なされるべきかもしれない。

そうであっても、巡礼本位の国民性の礎のもとに、自動車という便利で快適な手段が利用可能となれば、線巡礼から点巡礼への移行は自然な流れであると考えべきである。

点巡礼をしている「普通の参詣人」のことを、ろくにお参りもせずに納経帳に朱印だけをもらうマナーの悪い「スタンプ遍路」などと批判する姿勢もある¹⁸⁾。しかし、納経料収入をはじめとする、「スタンプ遍路」のもたらす経済効果は寺にとっても絶大なものであり、一方的に非難することはできないはずである。むしろ、こういった「普通の参詣人」が数多くやってくることによって、昨今の四国遍路ブームが盛り上がり、四国全体の経済へも貢献しているのである。宗教的厳格さばかりを強調し、歩いて回らねば意味がないなどと述べるような態度であったなら、四国遍路という文化そのものが衰退してしまっただろう。社会で受け入れられるための先鋭的な現在の価値観である、神秘性、達成感、気軽さの絶妙なバランスをもったレクリエーションとしての位置づけになったという、時代の変化への敏感な反応と寛容さがあったことが、昨今の賑わいを導いているものと考えられる。

4.4 ヘリコプター巡礼ツアーの登場

遍路の移動手段は時代と共に変化してきたが、1998年5月、四国航空により遂にヘリコプターでのツアーが開始された。究極の点巡礼である。「かつて雲や鳥のみに許されていた大

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

空からの風景を眺めれば、自分の悩みの小ささに気づくはず」と謳う¹⁹⁾。四国は信仰の霊地であるとともに、美しい海と山に恵まれた自然の宝庫である。陸路では見ることのできない、空から眺める大パノラマが、「21世紀の遍路」ヘリコプターによる遍路の最大の魅力と強調している。

全行程1400キロに及ぶ四国遍路は、歩くと約2か月、バスでも10日あまりかかる長い道のりとなるが、ヘリコプター・ツアーを利用すればわずか3泊4日で済んでしまう。目的はあくまでも四国遍路であり観光ではないので、ヘリコプターのなかでも、寺の上空で停止してお経を唱える時間が設けられており、機内には賽銭箱と納経の投げ入れ箱も設置されているという。

ルートはまず1日目は徳島空港を出発し1番霊山寺を参拝し、住職から巡礼の心構えなどの法話を聞く。2～7番をタクシーで参拝し、徳島空港へ戻り8～28番を空中参拝して高知空港着。2日目は29～32番を地上参拝、33～49番を空中参拝して松山空港へ。50番と51番を地上参拝。3日目は52～74番と81～83番を空中参拝して高松空港へ、途中66番雲辺寺のヘリポートに立ち寄り地上参拝もする。その後75～80番を地上参拝。最終日は84～88番を地上参拝して遍路を終える。

このヘリコプター遍路の開始が1998年5月7日の朝日新聞夕刊のトップ記事となった。そこでは巡礼は修行である派の作家早坂暁のコメントまで載せるなど、巡礼の効率追求もここまで来てしまったかというスタンスの、たいへん一方的な批判的記事となっている。

朝日新聞の記事ほど批判的にならずとも、ヘリコプターで上空にホバリングすれば訪問したことになるという感覚は万人には受け入れがたいようで、ヘリコプター遍路が紹介されている記事やガイドブックでもやや異端扱いされている²⁰⁾。また、このツアーに客がついて実施されたかどうかは不明である。

これまでの移動手段は歩くにしろ乗り物にしろ、地上をたどっていたわけで、「みち」を辿って移動していたのである。飛行機で〇〇県上空を通過したことがあるからといって、その県に行ったことがあるとは言わないように、四国遍路に参加することに信仰心が薄いからこそ、地に足がついてちょっとだけ苦勞して辿り着いたという経過がないと参加したことへの実感が少なくなるのではないか。画期的、利便性の行きつく先、究極の時間短縮などの好奇心をくすぐるための特徴づけはいくらでも並べられるが、費用が約100万円ということもあり、「普通の参詣人」にはヘリコプター遍路ではニーズを満たさないように筆者は思う。むしろ、身体的にもしくは時間的に等よっほどの事情がある、信仰心の篤い参詣人にこそ意味のある企画であるのかも知れない。

5. 巡礼の仕掛け人

川崎大師や成田山など、東京近郊の社寺への初詣の風習は、鉄道会社の貪欲な乗客誘致策の一環として仕掛けられ、定着したものである²¹⁾。一見宗教行事に見えることであっても、そこで利益をあげようとする企業が巧みな営業戦略を仕掛けていることはよくある。旅客輸送業者、宿泊業者、用品・お土産の製造・販売業者など、直接売り上げに関係する企業、ガイドブック等の出版社、ブームとなればそれを取り上げて紹介するマスコミなど、枚挙にいとまがない。

5.1 南海鉄道の企画

ここでは、四国に所在するわけではないが、弘法大師信仰の山である高野山への鉄道である高野山電気鉄道を傘下にもっていた南海鉄道（両社とも現南海電気鉄道）の行った四国遍路イベントについて紹介する。

1885年に最初の営業区間を開業し、1935年に50周年を迎えた南海鉄道は様々な記念の事業をその翌年にかけて企画した。そのひとつに四国八十八ヶ所霊場出開帳^{でがいちよう}があった。出開帳とは、寺社が自ら都市などに出張して参詣の便を図ることによって、新たな信者を獲得し収入を確保するためのより積極的な方法である。複数の寺社が共同で開催することも珍しくないが、これを四国八十八ヶ所の寺院を一堂に集結して開催しようということを南海鉄道が主導して企画したのである。まさに点巡礼の仕掛けということである。今でこそ、四国八十八ヶ所霊場会というものが存在し、一致団結した企画が順調に進みそうだとみられる向きもあるが、実はこの南海鉄道の企画が88ヶ所の揃いの出開帳の最初のものであり、その次は2005年に上野松坂屋等で実施されるまで、歴史上2度しかない稀有のお祭り騒ぎなのであった。

出開帳は、徳島と高知の札所を南海本線の助松駅（現松ノ浜駅）付近の会場に、愛媛と香川の札所を高野線の河内半田駅（現大阪狭山市駅）滝谷駅間の会場の2カ所に配置した。南海鉄道では、後者の会場の最寄の場所に新たに金剛駅を設置した（現存）。弘法大師を崇拜する宝号として唱えられる遍照金剛から名づけられたものである。これまで特に何もなかった場所でこういったイベントを開催し、両会場を訪れる出開帳参加者の鉄道利用を促した。小林1938 [21] では、この企画について以下のように自画自賛する²²⁾：

当社沿線の一大霊場たる高野山が年々百万近き参詣者を吸引し、弘法大師の恩徳を蒙る事の広大なるに鑑み是が報恩の一端として、また信者及び一般大衆に謝恩の微志として開催されたものである。併し乍ら四国八十八ヶ所の霊場寺院は今日では各宗派に分れて之を統制すべき機関なく、各寺院間に感情の上で、或は主義の上で相当に深刻な疎隔の生じてゐることは過去に於て幾度か計画された総出開帳が悉く

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

失敗の歴史を繰返してゐるのに見ても明瞭である。当社は之等失敗の歴史を知らぬのではない。而しながら此の深刻な疎隔を解消することも亦一大報恩の行為なりとの信念の下に断じて遂行の決心を固めたのである。荆棘の道ではあったが隠忍と努力は遂に報いられて快い解決点に達した。昭和十二年五月五日から同六月十六日迄四十三日間の出開帳、会場を二ヶ所に分ち第一会場本線助松遠州園に阿波土佐三十九ヶ寺を、第二会場高野線金剛園に伊予讃岐四十九ヶ寺を、夫々荘厳なる仏殿を営んで各寺の本尊仏を安置し、第二会場は河内半田駅と長野駅との中間に位してゐるので之れが参詣の便を図って新たに金剛駅が新設せられた。開帳中は降雨少なく少々酷熱に悩む嫌はあったが、期間を通じて各種の法要詠歌その他の宗教的行事が間断なく催されたので、両会場とも約二十万人の参詣客を見るの盛況を呈した。

このイベントの記録として、奉賛会 1938 [40] が編纂された。これに掲載されている出開帳の趣意書によれば「四国の霊場は 360 里に跨り之を巡拝するには数十日の日子を要し、足の弱い人や家事の忙しい人は、詣りたくても参る事が出来ませぬ」と書き出し、便利で手軽な四国遍路を目指す姿勢が見えている。また、このイベントの目的は (1) 国民精神の浄化と皇道精神の振作 (2) 昭和 9 年大阪市を中心として風水害の被害者の追悼、(3) 四国巡拝の真意義を宣明して弘法大師の慈光誓願に副う、としている。すでに満州事変勃発後の時期であるので (1) のような目的をまず掲げる必要があり、(2) はこの時期の近畿地方のイベントではよく掲げられた目的である。つまり、本来の目的である (3) にもっともらしい目的を加えて格好をつけたものであるといえる。運賃収入や信者獲得を目的として書くわけにはいかないのである。

手軽なスタンプ集めの巡礼をする「普通の参詣人」が溢れるおそれについて同書には、「納経印を眼の高さ位にゴム紐で吊して野戦郵便局と言った恰好のスタンプ式の尖端振りであった」「矢張り宝印はお坊さんから御本尊のお真言を唱へながら勿体らしく押して頂く処に有難味があり、又信仰の発露ともなり得るのである。人間の六感神経と言ふものは微妙な処で働くものである。」と混雑ぶりを報告する記述もある。また、「集印帳または絵葉書、扇子等に納経の捺印を希望せらるゝ人が相当あることゝ思はれたが、娯楽的捺印を求むる向の比較的少数であった事は、納経の有難さが保てゝ誠に結構な事と思はれた。」という記述もあり²³⁾、混雑はしていたようだが、信仰の場としての威厳は一定程度保てた模様である。

南海鉄道の資本力をもって実現された出開帳は、四国遍路が大々的に商品化された最初の例である。この出開帳が成功裏に終わったということは、四国遍路に出たいという潜在的需要が充分にあったこと、しかしその困難さゆえに実行に踏み切れない場合が多かったこと、まとめて納経ができれば満足できる参詣者が多く存在したこと、を示唆するものと考えられる。すなわち線巡礼のほうを良しとしながらも、効率性の高い点巡礼でも満足できる参詣者層が存在していたことを示し、現在の自動車遍路全盛の状況との違いは交通手段の利用が手軽で

あったかどうかの違いでしかない結論できる。

この後、戦争の激化によりこういったイベントはしばらく途絶えるが、戦後に落ち着きに戻ると四国遍路も復活し、交通手段の急速な発達と相俟って大いに興隆をしていくことになる。

5.2 ガイドブックの氾濫

四国遍路を案内する本は江戸時代から出版されてきているが、最近のガイドブックを概観することにより、現在の四国遍路が旅行者のあいだでどのような位置づけになっているかを探る。

JTBの発行する「るるぶ」シリーズは各地の観光地を紹介するガイドブックであるが、四国八十八ヵ所版も発行されている。観光地の特徴などのフレーズが表紙や背表紙に記されているわけであるが、JTB 2011 [25] では、「遍路をはじめよう」「週末はクルマで巡拝に」との誘い文句が踊り、背表紙には「ひょいと遍路へ」「味や温泉にも癒されて」とあり、四国遍路は気軽に始められるという感を前面に打ち出したものになっている。寺院の解説や地図などの肝心の情報はいたって真面目な内容となっているが、表層的には「普通の参詣人」を強く意識した構成になっている。

四国遍路を愛する会 1998 [26] は時期は [25] よりもかなり古いですが、ガイドブックとしてはかなり宗教的に真面目な指針でつくられている。その反面、「歩き遍路」という語を本文中ではふんだんに使用している点、「癒し」を書籍タイトルをはじめとして随所に押し出している点とについて、昨今続々と出版されている四国遍路ガイドブックの軽薄さをも包含するものとしてのごく初期的な例である。

ブルーガイド編集部 1998 [38] は前掲のヘリコプター遍路が載っている本である。本文中では、「四国霊場めぐりは巨大なテーマパーク」「信仰や観光をミックスしたパフォーマンスの旅」といった表現も使われており、四国遍路のレジャー化が進行している。さらに、「順番どおりにまわらなくてもよい」「観光もかねるつもりで」「ツアーを通して人との出会いをつくることも楽しみ」「自由気ままに週末遍路」といった、気軽さや楽しさを強調するフレーズも多い。

ブルーガイド編集部 2010 [39] は、中高年向けのガイドブックである。書籍タイトルに「ゆとり」を謳ってはいるものの、巡拝バスツアーの紹介ページでは「効率よく札所をめぐる」、巡拝タクシープランの同行記では「着々と旅程が進む」というように、効率のよさも強調してあったりする。現代の旅では、出発する気持ちにはゆとりがある中高年であっても、旅程は能率を重視するということであろうか。

このように、一般向けのガイドブックは、いずれも手軽さ、気軽さ、楽しさそして効率性を打ち出しており、「普通の参詣人」の入れ込み増加を目指している。

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

婦人画報社 1998 [37] は「歩き遍路」が一般的に使われるようになってきた頃の出版である。巻頭言に作家早坂暁の「歩いてこそその遍路みち」という題名の、歩いて魂を洗ってこそその四国遍路であるという内容の一文を掲載している。遍路みちを歩いた人物の手記も載っている。しかし、その一方で「伊予鉄一国参りバスツアー同行記」を5ページに亘って掲載するなど、編集の姿勢に一貫性がない。四国遍路にこだわりを持つ有名人が文を書いたもので掲載しないわけにはいかなかったということであろうか、数多く発行される出版物になかには、こういった中途半端な姿勢のものも少なからずある。

その一方、「歩き遍路」だけに特化した出版も相次いでいる。

宮崎 2007 [49]・2011 [50] は歩いて回る遍路向けのガイドブックである。遍路の心得はもちろん、巡拝プランの立て方から、携行品の準備、野宿の留意、足が疲れたときのマッサージのツボまで、実践に即したあらゆる解説がしてある。他に出版されている歩き遍路向けのガイドブックの雛形になっているとも言える本である。地図編では、歩いて訪ねるのに適した詳しさの地図に加え、霊場と宿泊施設の詳細なリスト（隣接する札所からの距離が逐一記載されている）が掲載され、最も詳しいガイドブックのひとつと言えるレベルの内容である。

ホーボージュン 2003 [41] は、四国遍路を完全にバックパッキングのフィールドと位置付け、そこをトレッキングするためのガイドブックである。アウトドアの技術や心構えの説明のみならず、筆者が実際に札所巡りをして取材した情報も含めた構成になっている。大量に出版される四国遍路ガイドブックでは、多少なりとも宗教的なことが書かれていることがほとんどだが、題名からしても、この本ほど宗教色の薄いものは珍しい。

松村 2006 [47] は「歩き遍路」の準備を調えるため専用のガイドブックである。まえがきで「四国へ赴く際はこの本は持たずに」と宣言するほどの徹底ぶりで、札所の紹介もほんのおしるし程度である。「歩き遍路」の人口の増加を出版側は感じとり期待しているものであろう。

個人の旅行記もたくさん出版されている。前掲の小林 1990 [23]、喜久本 1994 [18] をはじめとして、加賀山 2000 [16]、横井 2005 [55]、辰濃 2006 [28] など数多くある。いずれも、前からやってみたかったがやってみたら何か掴むものを得たという紋切型の展開のものが多し。横山 2002 [56] は写真ルポを主体とした旅行記、小林 2003 [22] は同書の著者と同世代の巡礼者への巡礼の最中のインタビューをまとめたものである。

出版社はより多く販売するために、世の中に受け入れられやすい企画をたてる。結果として出版されるものは、世の中の公約数的な動きを反映したものになる。出版の趨勢から見る限り、四国遍路は基本的には気軽なもの、ただし「歩き遍路」という特別なものもある、というのが現在の社会が四国遍路に抱いている感情と言えらるう。

5.3 テレビ番組

情報誌やガイドブックは消費者が手に取り、購入するという能動的行動をとって初めてその内容が伝達されるが、テレビ放送による情報はぼんやり見ている受動的な視聴者にもメッセージが送られることになる。本節ではテレビメディアの持つ圧倒的な物量パワーの流れを見ていくことにする。

森 2005 [51] では、NHK が放送した四国遍路に関するテレビ番組を分析している。そこでは、1995 年の『ふるさとの伝承』で四国遍路が取り上げられたこと、1998 年から 2 年間にわたり『四国八十八か所こころの旅』が放送されたことが紹介されている²⁴⁾。

同書も指摘するように、前者の番組は企画者の意図に沿う部分のみを切り出して強調してある場合が多いし、実際、放送された内容もいまの四国遍路の中心的な巡礼者の姿を追ったものではないという。

同書が「現在の四国遍路ブームを決定的にした」と折り紙をつけているのが後者の番組であり、内容分析に多くのページを割いている。そして、「四国遍路を巡礼としてではなく、「旅」として人々に紹介している」とし、それが「1970 年代以降のマス・メディアにおける四国遍路の取り扱い方」であると結論付けている。しかし、四国遍路を宗教行為でなく娯楽の旅行と見る姿勢はもっと昔からであるし、ごく最近の路線バス衰退とハイヤー・レンタカーの利用しやすさの向上などもあっての点巡礼化を考えると、この結論は単純化しすぎていると言わざるを得ない。

全国放送の NHK 総合テレビで 2 年間に亘って放送された番組であるから、世の中に何らかの影響を与えたことは確かであろうが、多くの若者も惹きつけている現在の四国遍路ブームを「決定的にした」という結論も言い過ぎであろう。なぜなら、この番組は日曜日の午前 6 時からのオンエアであり、そんな時間に見ている若者は多くはないだろう。また、出演者も若者が好み喜ぶような人たちではない。中高年向けの番組であったことは誰の目にも明らかである。視聴者ターゲットが絞られている番組が世代を超えたブームを決定的にしたとは結論しがたい。

森栗 2008 [52] では、NHK 教育テレビ「趣味悠々はじめてのお遍路」(2006.9~11) が、団塊の世代の男性の遍路ブームを牽引したと断言している。確かにこの番組は制作サイドも中高年向けの番組として位置付けており、放送時間も日曜の早朝などということのない見やすい時間である(平日午後 10 時)。ただし、この番組は世の中で流行になっている／なりつつあるものを次々に取り上げて中高年に紹介するものであり、制作された時期も考え併せれば、ブームを牽引したというよりはブームに乗って作られたというほうがふさわしい。

ウォーキングの流行に乗って制作された番組が「街道てくてく旅」である(NHK 衛星放送、2005~2010)。有名スポーツ選手らが、中山道などの道を毎日少しずつ歩き通していく様子を連日の中継で伝えていく番組である。2008 年 3 月から 10 月には、途中の中断を挟み、卓

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

球選手の四元奈生美が四国八十八か所を巡った。元気なアスリートを起用し、ファッションにも気を遣ったウォーキングで、中高年にアピールするだけでなく全世代に向けて作られた番組であることがわかる。ここで四国遍路が採用されたのも「歩き遍路」が登場しすでに定着していたからであると言える。

2012年10月からはBS-TBSで元日本テレビ放送網アナウンサーの徳光和夫が四国遍路をする「徳さんのお遍路さん四国八十八カ所心の旅」という番組も始まった。人選から考えても若者向けの番組ではなかろう。番組名も安易で、出演者のパーソナリティーに頼り切った、いかにも民放BS放送らしい安直な番組である。

完全に若者世代をターゲットとした番組で四国遍路を取りあげたものとして、北海道テレビ放送の深夜番組「水曜どうでしょう」を省くことはできない。この番組は基本的には旅番組であるが、なんらかの目的を掲げて旅に出て、その目的を逃げようとする過程でのタレントとスタッフの掛け合いの妙が番組の面白さの中心である。「水曜どうでしょう」はもともと北海道地方だけのローカル放送であったが、放送当初から若年層視聴者に絶大な支持を得、その後全国展開を果たし、現在も全国の放送局で再放送が続いている²⁵⁾。

この番組では、1999年3月、2000年4月～5月、2002年3月～4月の計3度、四国88カ所めぐりを放送している²⁶⁾。

そこでの四国遍路は、自動車ととにかく早回りをするものである。各札所では参拝も納経もせず、出演者が門前で記念写真を撮るだけである。ひたすらに急いで能率的に札所の訪問数を稼いでいく様子が放送される。限られた日程内で廻るため、早朝や深夜でも札所めぐりに走り回っていることもある。出演タレントの大泉洋らは、四国遍路の装束を着用してはいるものの、菅笠の前後を反対にして被っている場合²⁷⁾などもあり、宗教行動としてやっているとはまず考えられない。各札所での滞在時間が「スタンプ遍路」よりも短い、極限の点巡礼を番組にしているのである。そして、点と点との間を移動するレンタカーのなかでの、身内どうしの空間内における会話・雑談が延々と放送される。

自動車内の掛け合いが中心の旅であるから、実はこの番組ではどこにどのような旅行をするかについては、出発ための単なる理由づけに過ぎないわけである。1回目の四国遍路は受験生の合格を祈願するという名目で旅に出たのではあったが、放送された時期は受験シーズンを逸していたことなどからもこのことが確かめられる。

放送後の反応が好評であったものについては、同じ企画を繰り返し行うことも多い。四国遍路のシリーズが3度も繰り返されたということは頗る評判が良かった企画であることを証拠づけている。視聴者に対して、四国遍路とは自動車でこれくらいの日数がかかる旅であるという例証を与え、自らもそれを実行してみようかという動機を与えた。この番組こそ、これまで興味を持っていなかったであろう視聴者層に対して、四国遍路に対する初めての印象を強烈に与えた番組企画だったのである。

テレビ番組で四国遍路をする有名人は、つまるところ、仕事のために頼まれてやっているわけである。だれかに頼まれたわけでもないのに、難行苦行の四国遍路（歩きであっても自動車利用であっても）に出る場合とは根本的に違っている。映像のなかでいくら信仰心にあふれる態度を演じてみても、視聴者の多くはその嘘を見抜いている。そんななかで、「水曜どうでしょう」は旅行の途中でそもそもの旅の目的を見失ったり、食事や温泉などの寄り道に誘惑されたりしながら、出演者陣が本音の人間性を垣間見せつつ旅を続ける様子が共感を呼んだものであると思う。

6. まとめと展望

気軽に参加できそうで、けれども適度な困難さが伴い達成時の満足度の高いレクリエーションとして、歴史や文化的背景の神秘性をも備え持つ四国遍路は、現在多くの人々に支持されている。もともと巡礼本位の国民性の下地のあったところに、自動車の急激な発展が加わり、点巡礼の形態で年齢層を越えた賑わいを見せている。4.3節で考察したように、自動車内は日常の生活の延長としての場であり、その空間内に居ながらにして札所を移動し納経を受ける、かなり信仰心の薄い「普通の参詣人」も受け入れる姿勢があったことが、四国遍路にこうした興隆をもたらしたのである。厳格な宗教行為としてだけの存在であったならば、古臭い・面倒である、などのレッテルを貼られて衰微していたかもしれない。「古臭い」の代りに神秘的な歴史がある、「面倒である」を達成した時の充実感がある、などと言い換えることにより、新たな参加者の獲得に成功しているのである。

また、「歩き遍路」というやり方は、それをできない人からは羨望を集め、それを実行している人には大きな優越感をもたらし、これの存在が参加意識にさらなる刺激を与えているものと考えられる。

四国遍路を商機ととらえる企業も、信仰心の薄い「普通の参詣人」を巻き込み、増やすことに力を注いできたと言えるだろう。本稿では、南海鉄道の企画した出開帳、ガイドブックの出版傾向、テレビ番組のターゲットとする視聴者層について論考した。

四国遍路以外でも、巡礼は「点」化されていっている。

映画やテレビドラマのロケ地を訪ね歩く観光をフィルムツーリズムという。最近では番組の終わりなどにロケ地を明示して、積極的に観光スポット化を目指すことも盛んである。遠藤 2009 [11] では、フィルムツーリズムの例として「冬のソナタ」（韓国）と「世界の中心で愛をさけぶ」（香川県高松市）などが紹介されている。いずれも、これといった特徴のない並木道や防波堤などが、ドラマのなかで印象的なシーンに使われたことから、たくさんの訪問者でにぎわっているという。これらの地を訪れた観光客は、ドラマと同じ角度で記念写真を撮るそうである。すなわち、その場所のピンポイントの一地点を目指してやってくるのであ

写真-1 『おねがい☆ティーチャー』の聖地、木崎湖キャンプ場の栈橋



2012. 8. 24 筆者撮影

る。それらの「点」を繋いでさまざまなツアーが生まれ、多くの客が点巡礼に参加している。

こういったフィルムツーリズムにやってくる観光客の行儀の悪さはよく指摘される。柳田 1931 [53] の炯眼はすでに昭和初期の時点において、このことを「群の力を藉りて気が強くなり、普通故郷に在る日には敢えてし難いやうな我儘を続けて居る。何のことは無い、移動する宴会のやうなものが多くなった」と指摘している⁹⁾。また、長田ほか 2003 [15] では、「ある宿坊で数十人の遍路集団と隣り合わせの部屋に泊ったことがある。札所では彼らは熱心な参拝者にみえたが、宿では他人のことは構わない傍若無人な団体客になっていた」ともあるように²⁸⁾、札所巡礼者でも同じようである。ロケ場所見物のヤジ馬だからではなく、どちらも巡礼本位の団体だから行儀が悪いのである。

第2節でもふれたが、アニメのなかのシーンでもその地を訪ね歩くことが行われている。たとえば、長野県木崎湖周辺は『おねがい☆ティーチャー』作品シリーズの舞台となった場所である。2012年でこの作品が放映されてから10年経過したわけであるが、ファンの来訪は途切れず続いている。この年地元では「木崎湖巡礼十年の軌跡展」なる展示も行うほど、アニメ聖地巡礼はまちづくりの最優先事項になっている。

ところで、木崎湖でも鷺宮町でも、アニメ聖地巡礼者は非常に行儀がよく、地元の人々とのコミュニケーションもとれ、とても歓迎されているという(山村 2009 [54] による)。映画・テレビもアニメも同じような目的の点巡礼であるが、客層はずいぶん違うようである。この理由は次のように考えられる。それを観光化しようとする主体が仕掛けをしているフィ

ルムツーリズムとは違い、アニメ聖地巡礼はオンエアされた番組の視聴者が自ら行動を起こしたものである。企画者の計略に乗せられてしまった受動的なフィルムツーリズム体験者に対して、お気に入りのアニメのなかで描かれているシーンに潜む裏話を解明していこうという意思を持った自発的な行動なのである。4.1節で指摘した四国遍路の実施する態度の2分化と同じことが起こっている。「アニメオタクは虚構と現実との区別ができない連中だ」との安易な中傷がされるようになって久しいが、それはごく一部の者のことであって、大部分のアニメ愛好家は「所詮つくりものである」ことを冷静に理解していて自律がきく。アニメ聖地に到着してもじたばたしない。現実とドラマの区別がついていないのは、むしろ受動的なフィルムツーリズム参加者たちのほうであって、それゆえロケ地で興奮して大はしゃぎをしたり、昼夜構わず馬鹿騒ぎを起こしたりするのである。

こうした4.1節②タイプの人たちのなかには、いわばお仕着せのレディメイドの巡礼やスタンプラリーだけでは飽き足らず、自ら巡礼する対象を探し、「全体集合はこれである」との定義を己で下し、オーダーメイドの巡礼を始めている人もいる²⁹⁾。この、自発的オーダーメイド点巡礼については稿を改めて論考したいと思う。

注

- 1) 平山 2010 [36] 史料 6 大阪毎日新聞明治 32 年 2 月 20 日「西の宮十日戎の景況」、兵庫県西宮神社の十日戎が大いに賑わったという記事にある。神社にとって近世以来のなじみが深い信者ではなく、郊外行楽として都市部から参詣にやってくる、ついでに福を授かろうといった感覚の参詣客に対して、「普通の参詣人」という表現が使われた。エビス信仰はもともと漁業者の間でおこり、その後農民や商人にも浸透していったものである。
- 2) 大稔 2007 [13] の見解。メッカ巡礼という表現は少なくとも明治期には表れていたという。
- 3) 金山 2005 [17] の見解 p. 28
- 4) 天野 2010 [2] はサブタイトルが「全国 47 都道府県 88ヶ所巡礼マップ&フォト」、岡田 2011 [14] とともに不思議なパワーを感じる場所であることを強調している。松尾 2002 [46] は週刊誌の連載を書籍としたもので、神秘性や不思議感覚の過度な強調はない。
- 5) アニメーション作品の舞台となっている場所を見つけ出してそれを訪れる行動。アニメに描かれた風景や建物を聖地と位置付ければ、それを訪ね同じ場所に立つ行動は巡礼という語で表現することで満足度が高まる。たとえば、埼玉県鷲宮町は『らす☆きた』の舞台となった場所である。主人公は神社境内に住んでいることになっていて、その神社のモデルが紛れもなく鷲宮神社なのである。山村 2009 [54] では、この作品と『おねがい☆ティーチャー』作品シリーズの事例を取り上げている。
- 6) 林 2005 [33] によれば、鎌倉時代から巡礼と順礼の用例があるという。
- 7) 敬虔な信仰心から、もしくは教えの普及を図りたいことからの巡礼コース設定であっても、集客はまず必要なことである。松井 2009 [45]、長崎文献社 2010 [31] は商品化される聖地としての長崎キリシタン観光の事例である。
- 8) 大路 2001 [12] p. 42. 坂東三十三観音の紹介の冒頭。坂東三十三観音は西国三十三観音の“う

- つし”であるという。
- 9) 第6章「新交通と文化輸送者」3「汽車の巡礼本位」p. 261～262。旧字体は現字体に置き換えた、振り仮名は筆者（以下同）。
 - 10) 第5章1「柳田国男の文化論的鉄道史観」p. 401
 - 11) 巡礼するひとつひとつの訪問先が札所である。各札所では読経と納経を行う。納経とは、文字どおり写経した紙を納めるといふ行動と、納経帳と呼ばれるスタンプ帳に、寺を参拝したしるしとして寺が本尊の名などを書き押すスタンプ（朱印）を受ける行動とがある。両方行うのが本来であるが、写経はたいへんな準備が必要なので、スタンプ集め（有料）だけの場合が圧倒的に多い。
 - 12) 森 2005 [51] 第5章に、最初のバスツアーの様子が詳しく紹介されている。
 - 13) 自家用車またはレンタカーを使って巡礼すること、すなわち自ら自動車を運転して巡礼を行うことを、本稿では以下、自動車遍路と記すこととする。
 - 14) タイトルに「歩き遍路」という語が含まれている書籍の紹介記事は除く。読売新聞 1997 と毎日新聞 1997 は外部からの寄稿、朝日新聞 1998 はニュース記事。
 - 15) 浅川 2008 [1] 第2章 2-8 (2) 『歩き遍路の復活と隆盛』という項があるが、過去のものとは違うのであるから復活ではない。森 2005 [51] 第7章 4にある『「歩き遍路」登場!』という項の表題は筆者の意見と共通する。
 - 16) 長田ほか 2003 [15] 第5章 3節 1に、へんろみち保存協力会による同様の提言が他の媒体でもなされていたことが紹介されている。
 - 17) 早稲田大学文学部道空間研究会発行、第4章「四国遍路における移動メディア形態の変容」2-3節。
 - 18) 長田ほか 2003 [15] 序章では、『「巡礼」が「スタンプラリー」という俗なる語によって貶められる』という表現もあり、巡礼がスタンプラリー化している事実をかなり強く非難している。
 - 19) ブルーガイド編集部 1998 [38] にヘリコプターを使う巡礼が写真入りで詳しく好意的に紹介されている。
 - 20) 関 1999 [27] など。
 - 21) 平山 2005 [35] に詳しい。明治 20 年頃から定着した、元日に川崎大師に参詣することを「初詣」といった。
 - 22) 同書 p. 48-49
 - 23) 前者 p. 93, 後者 p. 83-84
 - 24) 同書では『ミニ紀行・四国八十八ヶ所』1984～と、衛星放送の『けさの霊場』1990 も挙げられているが、同書の著者はこれらの番組を見ることなく紹介していることがわかるので、ここでは取り上げない。
 - 25) 筆者は 2007 年頃に北海道内の、観光旅館でない商人宿に宿泊したことがある。安価な旅館では各部屋にテレビの備え付けがなく、食堂やロビーで見たい人はテレビやビデオなどを自分で使用するようになってきていることが多い。普通はそういった旅館に備え付けられているビデオは、ヤクザ映画や寅さんシリーズなどが多いのだが、北海道のその旅館では「水曜どうでしょう」の DVD が何本も置いてあった。北海道での同番組の人気の高さを物語っていると実感した出来事である。
 - 26) 時間の都合などで行かない札所も毎回何か所かあるが、3 回をまとめ合わせれば 88 か所すべて

- の札所を最低1度は訪れている。
- 27) まじめな宗教心から四国遍路をしていると思われる巡礼者でも、現地で観察していると、笠を後ろ前に被っている場合をよく見かける。前後のあることを知らなくても2分の1の確率で正しく被るわけでもあるから、それだけで「普通の参詣人」かどうかの断定はできない。
- 28) 長田ほか2003 [15] 第5章注25
- 29) 鉄道の全線乗りつぶし(石野1975 [4], 後藤1980 [20]), 貯金をしながらの郵便局めぐり(種村1995 [29], 1997 [30]) など。

参考文献

- [1] 浅川康弘, 巡礼の文化人類学的研究—四国遍路の接待文化—, 2008, 古今書院.
- [2] 天野雅道監修, 日本のパワースポット案内, 2010, 笠倉出版社.
- [3] 五十嵐英之, 知識ゼロからの遍路入門, 2010, 幻冬舎.
- [4] 石野哲, ボクは日本の鉄道全線走破チャンピオン, 1975, 旅, Vol. 49, No. 2, pp. 98-101.
- [5] 宇田正, 鉄道経営の成立・展開と「巡礼」文化, 1994, 法政大学出版会, 山本弘文編『近代交通成立史の研究』1994所収.
- [6] 宇田正, 鉄道日本文化史考, 2007, 思文閣出版.
- [7] エス・ピー・シー編, 四国八十八カ寺&周辺ガイド, 2009, 文化出版社.
- [8] NHK「四国八十八カ所」プロジェクト編, 四国八十八カ所こころの旅①~④, 1998, 日本放送出版協会.
- [9] 愛媛県生涯学習センター, 四国遍路のあゆみ 平12年度遍路文化の学術整理報告書, 2000, 愛媛県生涯学習センター.
- [10] 愛媛新聞社, 増えています「歩き遍路」, 1995, えひめ雑誌, Vol. 8, No. 10, pp. 26-31.
- [11] 遠藤英樹, メディアテキストとしての観光, 2009, ナカニシヤ出版, 神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ』2009所収.
- [12] 大路直哉, 日本巡礼ガイドブック, 2001, 淡交社.
- [13] 大稔哲也, イスラームの巡礼と参詣—エジプトの聖墓参詣を中心に—, 2007, 法藏館, 四国遍路と世界の巡礼研究会編『四国遍路と世界の巡礼』2007所収.
- [14] 岡田謙二, 日本のパワースポット案内巨石巡礼50, 2011, 秀和システム.
- [15] 長田攻一, 坂田正顕, 関三雄編, 現代の四国遍路—道の社会学の視点から—, 2003, 学文社.
- [16] 加賀山耕一, さあ、巡礼だ, 2000, 三五館.
- [17] 金山秋雄, 巡礼の諸相, 2005, 風間書房, 明治大学人文科学研究所編『明治大学公開文化講座 巡礼—その世界—』2005所収.
- [18] 喜久本朝正, 四国歩き遍路の記—法服を白衣に替えて—, 1994, 新風書房.
- [19] 講談社編, 四国遍路パーフェクトガイド徳島・高知編・愛媛・香川編, 2010, 講談社.
- [20] 後藤宗隆, 国鉄完乗第一号, 1980, 旅, Vol. 54, No. 8, p. 116.
- [21] 小林尚一編, 南海鉄道発達史, 1938, 南海鉄道.
- [22] 小林キユウ, Route88 四国遍路青春巡礼, 2003, 河出書房新社.
- [23] 小林淳宏, 定年からは同行二人—四国歩き遍路に何を見た—, 1990, PHP 研究所.
- [24] 佐藤久光, 遍路と巡礼の社会学, 2004, 人文書院.
- [25] JTB パブリッシング出版事業本部国内情報部関西編集部編, るるぶ四国八十八カ所, 2011,

四国遍路の変容から見る現代の巡礼の方向性

JTB パブリッシング.

- [26] 四国遍路を愛する会編, 四国八十八カ所心の旅癒しの旅, 1998, 海竜社.
- [27] 関三雄, 四国遍路と移動メディアの多様化, 1999, 社会学年誌, No. 40, pp. 65-80.
- [28] 辰濃和男, 歩き遍路, 2006, 海竜社.
- [29] 種村直樹, 日本縦断「郵便貯金」の旅, 1995, 徳間書店.
- [30] 種村直樹, 気まぐれ郵便貯金の旅, 1997, 自由国民社.
- [31] 長崎文献社編, 長崎・天草の教会と巡礼地完全ガイド, 2010, 長崎文献社, 第4版.
- [32] 野町和嘉, 聖地巡礼, 2010, クレヴィス.
- [33] 林雅彦, 日本の巡礼, 2005, 風間書房, 明治大学人文科学研究所編『明治大学公開文化講座 巡礼—その世界—』2005所収.
- [34] 平幡良雄, 観音札所巡りのすべて, 1981, 廣済堂出版.
- [35] 平山昇, 明治期東京における「初詣」の形成過程—鉄道と郊外が生み出した参詣行事—, 2005, 日本歴史, No. 691, pp. 60-73.
- [36] 平山昇, 明治・大正期の西宮神社十日戎, 2010, 国立歴史民俗博物館研究報告, No. 155, pp. 151-172.
- [37] 婦人画報社編, 四国八十八カ所お遍路の旅, 1998, 婦人画報社.
- [38] ブルーガイド編集部編, 通の行く旅四国八十八カ所やすらぎの旅—新しい「お遍路」の歩き方, 1998, 実業之日本社.
- [39] ブルーガイド編集部編, てくてく歩き四国八十八カ所ゆとりの旅, 2010, 実業之日本社.
- [40] 奉讃会編, 四国八十八ヶ所霊場出開帳誌, 1938, 四国八十八ヶ所霊場出開帳奉讃会.
- [41] ホーボージュン, 四国お遍路バックパッキング, 2003, 小学館.
- [42] 星野英紀, 歩きと巡りの宗教性, 1986, 春秋社, 井上光貞, 上山春平編『大系仏教と日本人 6 遊行と漂泊』1986所収.
- [43] 星野英紀, 四国遍路にニューエイジ?, 1999, 社会学年誌, No. 40, pp. 47-64.
- [44] 前田淑, 吉野の花見と伊勢参り—小田宅子『東路日記』, 2006, 国文学解釈と鑑賞, Vol. 71, No. 8, pp. 132-140.
- [45] 松井圭介, 聖地創造と消費される文化, 2009, ナカニシヤ出版, 神田孝治編『観光の空間—視点とアプローチ—』2009所収.
- [46] 松尾潔, 学食巡礼, 2002, 扶桑社.
- [47] 松村博一, 四国八十八カ所歩き遍路のはじめ方, 2006, JTB パブリッシング.
- [48] 三浦哲郎, 人里風土記—四国路の春, 1992, 作品社, 早坂暁編『日本の名随筆別巻 21 巡礼』1992所収, 初出: 1973 小説サンデー毎日.
- [49] 宮崎建樹, 四国遍路ひとり歩き同行二人解説編, 2007, へんろみち保存協力会, 第7版.
- [50] 宮崎建樹, 四国遍路ひとり歩き同行二人地図編, 2010, へんろみち保存協力会, 第9版.
- [51] 森正人, 四国遍路の近現代—「モダン遍路」から「癒しの旅」まで—, 2005, 創元社.
- [52] 森栗茂一, お遍路公共交通会議の提言, 2008, 交通工学, Vol. 43, No. 2.
- [53] 柳田國男, 明治大正史・世相篇, 1931, 朝日新聞社, 1963 定本柳田國男集 24 筑摩書房所収.
- [54] 山村高淑, 観光革命と 21 世紀: アニメ聖地巡礼型まちづくりに見るツーリズムの現代的意義と可能性, 2009, メディアコンテンツとツーリズム (CATS 叢書 1) 所収.
- [55] 横井寛, 準・歩き遍路のすすめ, 2005, 講談社.

- [56] 横山良一, 四国遍路1 阿波徳島編発心, 2002, 角川書店.
- [57] 頼富本宏監修, 四国八十八ヶ所はじめての遍路, 2009, 日本放送出版協会.
- [58] 頼富本宏, 四国遍路とはなにか, 2009, 角川学芸出版.
- [59] 早稲田大学文学部, 現代に生きる四国遍路道—四国遍路の社会学的研究, 1998, 日本図書センター, CD-ROM.
- [60] 早稲田大学文学部道空間研究会, 現代社会と四国遍路道, 1994, 早稲田大学文学部道空間研究会.
- [61] 早稲田大学文学部道空間研究会, 四国遍路と遍路道に関する意識調査, 1997, 早稲田大学文学部道空間研究会.

—2012年10月26日受領—

